

洞町窯垣の小径

● 散策時は車に十分注意し、歩道を歩きましょう。
● 私有地への無断立入・写真撮影はやめましょう。

洞町の歴史

洞町は二つの山が迫った谷間の町であったことから、その山の斜面を利用して江戸時代以降に多くの登窯が築かれ、瀬戸の窯屋の集積地のひとつとなった。この洞町では、江戸時代中期には「馬の目皿」「石皿」、明治時代に入ってから「本業タイル」などの本業製品のベストセラ―が生み出された。今でもむかしの名残がある工場、陶芸作家の陶房などが点在しており「やきもの里」としてのたたずまいが感じられる町である。

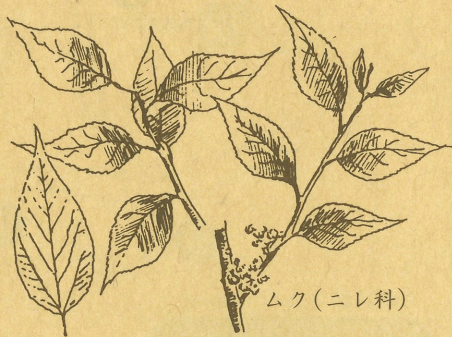
また、平成12年には、都市景観形成重点地区に指定され、町並の保全が図られている。
※本業とは、瀬戸での陶器の呼称

洞町の歳時記

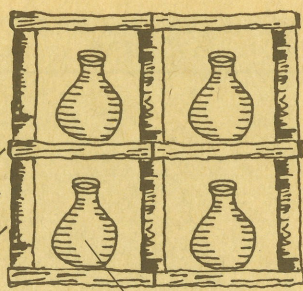
3月第1日曜日〈窯垣の小径まつり〉
7月第2日曜日〈弥蔵観音縁日〉
11月8日、12日〈宝泉寺薬師祭典〉
12月第1日曜日〈秋葉神社祭礼〉

棕の木

洞のあちらこちらに見られる棕の太木は固い材質で、その昔、製品を運ぶための天秤棒として利用するために植えられたものといわれている。

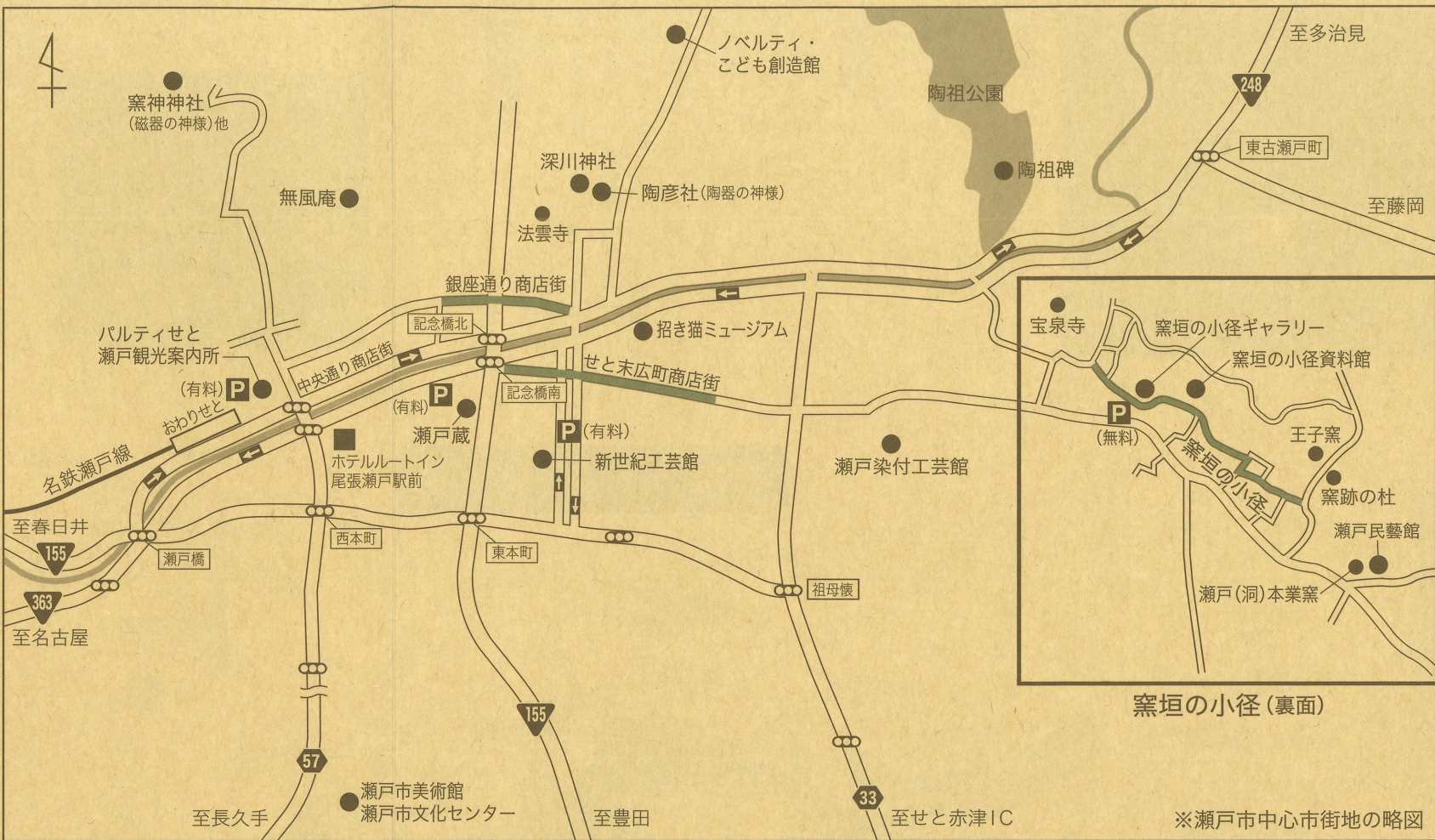


登窯の製品の詰め方



窯垣とは窯道具で作った塀や壁の総称で、洞町には新旧合わせてたくさん窯垣が残っている。国内でこうした風景が見られるのは瀬戸だけである。「窯垣の小径」とはこの窯垣が密集している場所をつなぐ延長約400mの細い路地で、その昔はこの小径がメインルートで窯元の屋敷が並び、陶工たちが往来したという。また、窯道具は、登窯を焼く時に製品を保護するため使ったエンゴロ(屑鉢)、タナイタ(エブタ)、ツクなどのことで、幾何学模様や自然釉の色合い、道具に印された窯屋の刻印などが歩くひとの目を楽しませてくれる。

窯垣の小径



窯垣の小径(裏面)

※瀬戸市中心市街地の略図



窯垣の小径

窯屋の刻印が見られる窯垣(大エンゴロ)

陶祖碑

陶祖・藤四郎の偉業を称える六角形の陶製碑で慶応3年(1867)に完成。高さ約4m、六角の各面の幅約60cmで大小29個の陶器から成っている。



陶祖碑

陶祖・藤四郎(加藤四郎左衛門景正)

鎌倉時代に僧道元に従い宋(中国)に渡り、陶業技法を学び帰国。瀬戸で良質の陶土を発見したことで窯を開き、瀬戸陶業の発展の礎を築いたとされている人物。毎年4月の第3日曜とその前日には藤四郎を偲ぶ「せと陶祖まつり」が行われる。瀬戸に多い「加藤姓」のルーツといわれている。

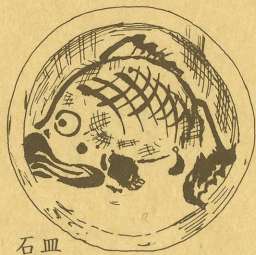
洞のベストセラ―製品

石皿・馬の目皿

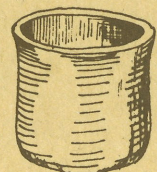
江戸時代中期から大正期まで盛んに焼かれた洞を代表する焼き物。呉須と鉄で描かれた素朴な絵柄は民藝運動の指導者である柳宗悦らによって絶賛を受けた。また、洞ではこれらの皿のほかにも油皿、刷毛徳利、柳葉茶碗、染付茶碗、すり鉢、水がめなど生活に必要なやきもののほとんどがつくられていた。



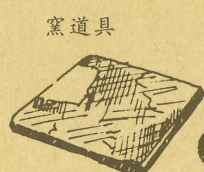
馬の目皿
茶色の絵具で渦巻模様を描かれた皿



石皿
青色と茶色の2色の絵具で絵付けされた皿



エンゴロ



タナイタ(エブタ)



ツク

問い合わせ先

瀬戸市まるっとミュージアム・観光協会

0561-851-2730

発行・令和7年5月



観光協会HP



散策絵図

窯垣の小径資料館

窯垣の小径資料館は、明治初期の建築の本業焼の窯元の屋敷を改修したものである。この資料館の見どころは、窯道具を使ったカマドや浴室の床と腰壁に張られた「本業タイル」、離れにある本業タイルと染付便器で彩られた厠（トイレ）である。

開館時間 午前11時～午後3時
休館日 月～水曜日・年末年始
(祝日は開館)



浴室に貼られた本業タイル

本業タイル

「本業タイル」とは、日本の量産タイルの源流ともいえるもので、陶器質の素地に磁器質の化粧土を塗って仕上げ、銅版転写などで絵付をしたタイルで、明治・大正とその生産は全盛を迎えた。



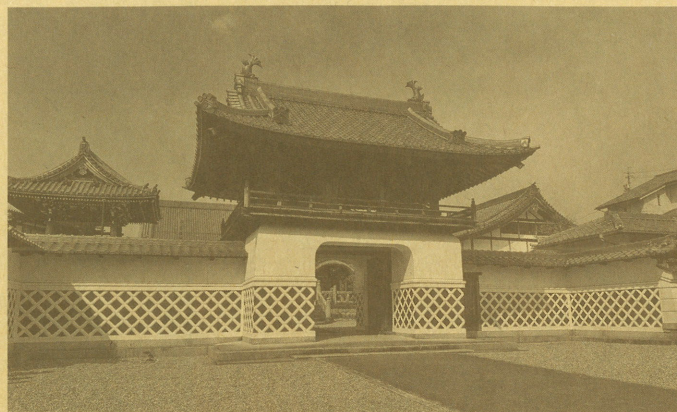
本業タイル

窯跡の杜

この杜は、明治時代から昭和前期まで稼働した巨大な登窯「奥洞窯」を中心に数軒の窯屋が操業した企業集積地であった。ここでは、洞のベストセラー製品の石皿、馬の目皿、本業タイル、すり鉢、かめなどがつくられていた。現在は里山林となった杜を往時を偲びながら散策できる。

宝泉寺

約750年前前に創建された曹洞宗の寺で、本尊は釈迦如来、脇侍に陶質十六羅漢（市指定文化財）を祀る。瀬戸の陶工の作といわれる本堂天井絵や竜宮様式の山門も見どころである。



宝泉寺山門

王子窯モロ(市指定文化財)

※「モロ」は瀬戸の方言でやきもの工場を指す。

王子窯モロは、本業焼(陶器)生産の工房建物である。明治33年(1900)の建造で、木造二階建て、間口二十間、奥行六間と東西に細長く、一般的なモロと比べて大きい。内部は厚い土壁をめぐらし、南西の四ヶ所に小窓がつくのみで室内の乾燥を防ぐためのモロの典型的な造りとなっている。一階で成形、二階で半製品(焼成前製品)の施釉・乾燥・保管を行い、焼成を行う登窯までを機能的につなげる工夫がなされており、瀬戸市内のモロでは最古級で、残されている貴重な窯業機械・道具とともに文化財としての価値を有している。

また、瀬戸の風景を特徴づけた重油窯の煙突もあり、かつて窯業生産で活況を呈した当時の姿を偲ぶことができる。

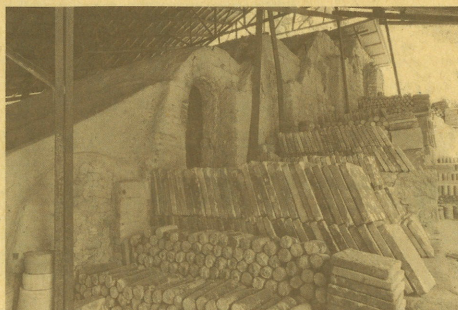
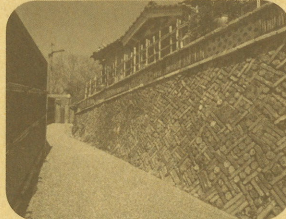


王子窯モロ

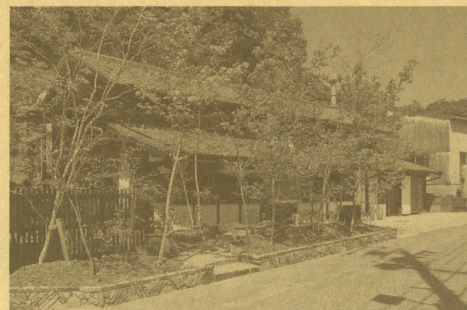
窯垣の小径 散策図



★窯垣のフォトスポット



洞本業窯



瀬戸・ものづくりと暮らしのミュージアム「瀬戸民藝館」

現役の窯元である瀬戸本業窯のものづくりの源流となっている、江戸時代後期(19世紀)から昭和時代前期(20世紀半ば)の器と、大型の登窯「洞本業窯」が展示されているミュージアム。併設の工芸ショップでは、瀬戸本業窯の製品のほか、ガラス、染織、木工、わら細工など全国のつくり手の作品が並ぶ。

入館料 一般600円 高校生以下300円
営業時間 午前10時～午後4時30分(午後4時最終受付)
定休日 月・火・水(祝日は営業)
連絡先 0561-21-3773

洞町の陶房・製陶所

窯垣の小径資料館で一部作品を展示しています。

No	陶房・製陶所名
①	五山陶房
②	楽窯房
③	pottery木(ki)(毛利記代子)
④	王子窯
⑤	宝泉窯
⑥	井上 匠
⑦	陶博園
	伊藤 準
⑧	旬イワツキ
⑨	共同製作所
	冬眠鼠窯(山根宏一)
	工房梅田
	蝸牛窯(西谷敏昭)
	三田 眞幸
⑩	MANA工房
⑪	瀬戸本業窯
⑫	水野教雄陶房
⑬	TOHCA 陶華

(R7.3現在)

窯垣の小径ギャラリー

窯垣の小径ギャラリーは、300年ほど前の江戸時代に建築された窯元の屋敷で、1869年(明治2年)に柱などはそのままに残して改修された。家の中心の部屋の周りに四本のしっかりした柱を建てることから「四つ建て」といわれる尾張地方に残る特徴ある古い民家の様式を今に伝えている。現在は洞町で活躍する作家の作品を中心に、不定期に企画展を開催している。



洞本業窯(市指定文化財)

本業窯とは、陶器を焼く登窯のことで、主にすり鉢、かめなどの製品を焼成していた。洞本業窯は戦後まもなく作られた4連房のもので、昭和54年まで実際に使われていた。全長14m、最大幅7mで燃料には薪を使い、約一週間をかけて焼成していた。

陶質十六羅漢像(市指定文化財)
江戸時代後期の名工加藤善右衛門の作。天保十四年(1843)制作。
この羅漢像は陶器でつくられ、袈裟衣には織部や黄瀬戸など、瀬戸ならではの釉薬が施されている。